JO

第５号　2013.10.21 発行
発行者：株式会社協進印刷
編集者：JO 編集委員会

スローレーベルは、成長というより進化なんです。

スローレーベルディレクター　栗栖良依さん

今回は特別企画として、アーティストやデザイナーと企業や福祉施設などを繋げ、新しいモノづくりとコトづくりに取り組むプロジェクト「スローレーベル」のディレクター栗栖良依さんと、株式会社協進印刷代表取締役江森克治とのクロス対談を２号にわたってお届けします。

江森：まず初めに「スローレーベル」が誕生した経緯について伺いたいのですが。

栗栖：もともとは株式会社ワコールアートセンターが推進してきた「ランデヴープロジェクト」が、象の鼻テラスのオープンとともに横浜でスタートしたのが出発点です。当初は企業を対象にしていたのですが、たまたま交流会に参加していた福祉作業所の方が手をあげてくださったことで、障がい者の方々との交流が始まりました。

江森：福祉作業所もモノづくり拠点の一つと考えたということですね。

栗栖：これまでは企業やプロの職人さんとのランデヴーだったので、どちらかといえばマスプロダクション（大量生産）に近いモノづくりだったのですが、福祉作業所では「手のモノづくり」が展開されているわけです。マスプロダクションが同じ色同じ形のものを大量に効率良く作ることに優れているのに対して、福祉作業所ではひとつ一つ色や形を変えることができる。これはもしかして大きな可能性があるのではないかと思ったのです。ならば、その特徴をより際立たせる形でレーベル化しようということでスローレーベルが誕生しました。

江森：そこで「マスプロダクションからスローマニュファクチャリングへ」というコンセプトが生まれてくるわけですね。従来の製造業の発想と正反対ですが、スローなモノづくりが必要だ、あるいは有効だと考えた裏にある社会的背景とは、どのようなものなのでしょうか。

栗栖：いま色々なことが行き詰まっている中で、そもそも「マス（大量）」という考え方そのものに行き詰まりがあると思うんですね。これから人口だって増えることはないし、コンパクトシティとかコンパクトカーとか、世の中がコンパクト化していく中で、モノづくりの考え方も変わらざるを得ないと思うのです。

江森：しかし社会的に有意義であるとわかっていても手作りの商品は当然値段が高くなるわけですよね。スローマニュファクチャリングが根付くには消費者側にもそれなりの意識が芽生えないといけないと思いますが。

栗栖：手作りといっても熟練の職人さんが作る工芸品とは違うわけです。でもマスとも違う。これまでにない中間的な存在なのでマーケットもあるようなないような…。震災以降「エシカル（倫理的な）」という言葉も流行っているように、百貨店なども理解は示してくれるようになってはいますが、まだまだ過渡期なので販売の難しさはあります。流通の仕組みもマスプロダクトが前提になっているので、消費者の理解もそうですが、その一歩手前の流通や小売りの理解も求めていかなければいけないと思っています。

江森：スローレーベルではワークショップのイベントもたくさん開催していますね。

栗栖：消費者ひとり一人の中に「自分も作る側にまわりたい」というモチベーションが非常に高くなっていると感じます。今までは安く買ってすぐ捨ててということをやっていた消費者が、「こんなこと続けてちゃいけないよね」と漠然と感じていたり、ある意味では買うこと自体に飽きてきてい

●スローレーベル（横浜ランデヴープロジェクト）
横浜市文化観光局、株式会社ワコールアートセンター（スパイラル）が運営する「象の鼻テラス」において、アーティストと多様な人材をつなぐ「横浜ランデヴープロジェクト」より２０１１年に誕生した手づくり雑貨ブランド。福祉作業所との商品や参加型プログラムの開発を通じて、手でモノをつくることの楽しさ広めている。
http//www.slowlabel.info/

たり、理由は色々あると思いますが、自分も手を動かして何かを作りたいという衝動に駆られている気がしますね。そういう意味では社会的弱者が作った商品を買ってくださいというよりも、一緒に作りましょうよというプロジェクトにシフトしてくことに価値があるようにも思います。でもスローレーベルとしては、それが趣味や手芸と同じでは意味がない。ここが難しいところですね。

江森：職人ワザでもなく手芸でもなく、それでいて経済的価値も作っていこうというのですから、とても難しい課題へのチャレンジですね。

栗栖：自分でもそう思います（笑）。福祉作業所にも、元々手先が器用な方や、同じ視覚障がいでも少し見えている方もいて、やっぱりそういう方は作業も上手なので数人に仕事が集中するという現象が起こります。でもそれだとやっぱり目が見えるにこしたことはないよねというようなところに戻ってしまって、意味がないというか、そうじゃない発想のモノづくりができないかなと思っています。

江森：それでは本当の意味でのユニバーサルではないということですか。

栗栖：そういうことがあって最近取り組み始めたのは、アーティストにプロダクトをデザインしてもらうのではなくて、製法とか道具とか、身体が不自由な人でも上手に作れる方法を見出すことにアーティストの創造性を発揮してもうということです。それによって障がい者が素敵な製品を作れるということになれば、新しいモノづくりへの一歩になるのではないかと。

江森：近代社会が作ってきた経済合理主義というのは、実に良く出来た仕組みなんですよね。これに代わるものがなかなか作れない。

栗栖：それはすごく思います。スローマニュファクチャリングやっていると、「だからマスプロダクションなんだよな、かなわないな～」と思うことばかりです（笑）。

江森：しかしそれだけでは決してこれ以上成長できない。だからこそ、そこにアーティストとかクリエイターと呼ばれる人たちの存在意義があるということでしょうか。

栗栖：そうですね。私は「よそもの」であることに意味があると思っています。多くの場合、その業界や企業の中にある成功事例を検証しながら、次にどうしようかということを考えているのだと思うのですが、そこに「よそもの」の視点を入れることによって、意外なブレイクスルーが起こるところをこれまで何度も見てきました。必ずしもヒット商品が生まれるとか、デザインが良くなるとか、そういうことだけではなく、気づきを与える存在として、アーティストの嗅覚とか感性が役に立つと思います。

みんなにやさしい「ユニバーサルシティ」を横浜から発信していきたいですね。

江森：人口も減り、経済も今までのようには伸びない時代に、それでも我々が成長を続けていく、それは経済的なことだけではなく、精神的なことも含めてですけど、そのためにはやはり企業がイノベーションを起こして、これまでの考え方をぶち破らないと無理だと思うんですよね。

栗栖：そうですね。私は成長ではなく進化だと思っています。成長というこれまでの延長線上ではなく、まったく新しいものに生まれ変わる覚悟が必要なんだと思います。七年後にオリンピックが来ることもきっかけになったらいいと思うし、そこにスローレーベルが関われたらいいなと思います。

江森：それは素敵なことですね。

栗栖：来年三年に一度の現代アートの祭典である横浜トリエンナーレが開催されますが、そのときに障がいのある方々とスローレーベルだからこそできる関わり方をしたいと思って、いま準備を進めています。それも単に絵のうまい障がい者を支援するみたいな取り組みではなくて、それを通じて障がい者にもやさしい都市の設計とか、それは結局お年寄りや健常者にもやさしいということですから、そういうことをみんなで考えられるきっかけになったらいいと思っています。

江森：「ユニバーサルシティ」ですね。横浜からそういうコンセプトを発信できたら素晴らしいですね。

栗栖：私は三年前に大きな病気にかかって脚が不自由になったわけですが、いま個人的に一番欲しいのは好きなところに自由にいける道具なんです。都市におけるパーソナルモビリティなんて、一番研究して欲しいことのひとつです。

江森：そこは是非聞いておかなければならないところなのですが、身体が不自由になったからスローレーベルのようなコンセプトが出てきたのか、それとも栗栖さんは以前からそういう考えをもっていたのか、どちらでしょう。

栗栖：もちろん自分が障がい者になって変わったことはたくさんあると思いますが、もともと私はダイバーシティのような発想は持っていたと思います。特に福祉の仕事をしていたということではありませんが、国籍とか文化とか障がいの有無とか、偉いとか偉くないとか、そういうことにはまったく差を感じません。だから自分が障がい者であることにも抵抗はないし、障がいのある人と仕事をすることにも抵抗はありません。

江森：これからの目標をお聞かせください。

栗栖：実は私はオリンピックの開会式をプロデュースするのが夢なんです。高校生のときにリレハンメルオリンピックの開会式を見て、この道に進もうと思ってやってきましたが、病気をして障がい者として社会復帰してからは、パラリンピックの開会式のプロデュースと言い続けています（笑）。

江森：東京オリンピックは絶好の機会！

栗栖：オリンピックは日本という国を世界の人たちにプレゼンテーションする最大のチャンスだと思います。単に美しい開会式を作るということだけではなく、都市の仕組みとか、社会のありようとか、そういうところに踏み込んでいく活動につながればいいなと思います。

小さな命を守りたい！

市内幼稚園に「ぼうさいえほん」を配布

本業を通じた社会貢献事業として、幼児向け防災マニュアルともいうべき「ぼうさいえほん」を、横浜市内の幼稚園に約六万部配布しました。

東日本大震災直後の２０１１年６月に「おえかきちょうプロジェクト」で岩手県の保育園に余り紙を活用したおえかきちょうを配布した際、現地の保育園の先生方から震災時の様子を聞き、他人事ではすまされないと痛感。震災の記憶を風化させないために何かできることはないかと模索していたところ、全国青年印刷人協議会の仲間から、愛知のＮＰＯが幼児向けに地震の際の注意点を絵本風にまとめた「ぼうさいえほん」を作っていることを聞き、これを横浜で配布しようと思い立ちました。ただ横浜市内には幼稚園に通う児童だけでも約六万名いることから、主旨に賛同していただける協賛企業を募集。株式会社神奈川ナブコ、株式会社横浜ＤｅＮＡベイスターズ、コンテンツワークス株式会社が快諾してくださり、三社のバックアップのもとこの度無事に発行の運びとなりました。

また防災マニュアルという性質上行政機関にも監修したいただく必要があると考えていましたが、市会議員の鈴木太郎先生の紹介で横浜市共創推進室を窓口とした公民連携事業に採用していただくことができ、監修元である総務局危機管理室とのやりとりもスムーズに進めることができました。

九月三十日には横浜市から記者発表され、神奈川新聞、朝日新聞、タウンニュースに記事が掲載され、大きな反響を得ることができました。

ぼうさいえほんは（公財）横浜市幼稚園協会を通じて、十月一日から順次協会加盟の２５８園の全園児に配布され、幼稚園協会からは弊社をはじめ協賛三社にも感謝状をいただきました。幼稚園協会の木元茂会長からは「大地震のときにはまずは自分の命を守る〈自助〉の重要性が叫ばれる中、幼児の頃からの自助教育にとても有効な教材」であるとご評価いただきました。この絵本がたとえひとつでも小さな命を守る一助になってくれればと願いつつ、来年は配布先に保育園も加えた九万部を配布してみたいと意欲を燃やしています。

ご協力いただきました協賛企業の皆様、横浜市の皆様、横浜市幼稚園協会の皆様には心より御礼申し上げます。

記事が掲載された朝日新聞（上）、神奈川新聞（中）、タウンニュース神奈川区版（下）

線路と街と

最終回　「横浜の発展と臨港線」

文・写真　石井健太郎

――臨港線

荷役の効率を上げるために、港の埠頭まで伸びた路線のことを言います。

全国各地に存在し、今でも現役で活躍する路線が数多くありますが、その存在はあまり知られていません。しかしながら、物流の歴史はその街の繁栄の象徴であり、根強く深く、街の陰の立役者として、昼夜問わず今日も活躍しています。

東洋一の商港と謳われた横浜も、臨港線に支えられてきました。現在のみなとみらい地区から山下公園へ延びる「汽車みち」を見ても分かるように、横浜港周辺には無数の線路が張り巡らされていました。以前このコーナーでも紹介した、現ＪＲ横浜線からの生糸輸送が横浜の臨港線の始まりだったとされており、一九一〇年に東神奈川から瑞穂埠頭方面へ海陸連絡線が新設され、短命ながらその輸送に大きく貢献しました。

震災を乗り越え、戦争を乗り越え、その度に幾度も移転や運転形態を変えて来た横浜の臨港線でしたが、昭和四十年代に入ると衰退の一途を辿ります。トラック輸送などのモータリゼーションの到来がその原因とされますが、既に物量そのものが減少していたのです。

昭和五十年代に入ると廃止や統合が相次ぎ、後にはみなとみらい21計画の進展と、時代の波は容赦なく横浜の臨港線を追い込みました。大半の線路が撤去され、荷扱いをする駅も全廃し、当時の繁栄は見る影もなくなりました。

しかし現在も、横浜の臨港線は生きています。通称「高島貨物線」はＪＲ桜木町駅から分岐し、東高島貨物駅を経由して鶴見へ至る八、五キロメートルの路線で、その殆どが横浜臨港線の最盛期に敷設された路線を活用しています。すっかり整備されたみなとみらい地区こそ一九九七年に完成した地下トンネルで抜けますが、ポートサイド地区付近を過ぎた辺りからは、臨港線ならではの雰囲気が残っているのです。

今では根岸からの石油輸送が主たる運用ですが、時には逗子方面からの新車回送、または旅客を乗せたイベント列車の運行と、鉄道ファンを喜ばせる路線の一つとして注目を集めています。

全国どの臨港鉄道を見ても共通して感じる哀愁感。お世辞にも美しいとはいえない殺風景な工場地帯の栄枯盛衰を寡黙に見つめて来たからこそ、臨港線にしか出せない味があり、他にはない風格がある。僕はそう思っています。踏切の乾いた警報音、重く響く長い貨物列車のジョイント音。そしてまたやってくる静寂…高島貨物線の沿線に行くだけで、いつもと違う横浜の顔に会える気がします。

Kyoshin TODAY

「あんだもがんばっぺしバッグ」で南三陸を応援！

9月「ありがとうの日」活動報告

毎月十日ステークホルダーに感謝の気持ちを表す「ありがとうの日」。9月は南三陸ミシン工房の「あんだもがんばっぺしバッグ」に、日本製紙石巻工場抄造で災害復興支援商品の「モンテルキア」の用紙サンプルを添えて、デザイナーさんを中心に活躍中の女性にプレゼントしました。

南三陸ミシン工房は、東日本大震災で被災した女性たちが、ミシンを仕事や生きがいにしていくための「ミシンでお仕事プロジェクト」という活動を通して立ち上がった工房。全国から贈られたミシンを使い、南三陸に暮らす二十名の女性が、アパレルメーカーから委託された製品やオリジナル製品を作り、一日も早い自立を目指しています。南三陸ミシン工房副代表の鈴木やすかさんが、弊社代表江森と同じ大学の卒業生というご縁で、ささやかではありますが応援させていただくことになりました。

「あんだもがんばっぺし」とは南三陸弁で「あなたもがんばろうね」という意味。最後に「しがつくことで「一緒に」というニュアンスになるのだそうです。

今後も本格的に活動を継続していくために、この春にはNPO法人化した南三陸ミシン工房を皆さんも応援よろしくお願いします！

大口自慢

横浜愛育会

大口の魅力を紹介していく「大口自慢」今回は、横浜愛育会さんです。

地域作業所として誕生した「おおぐち工房」さんは、「障害のある人たちが地域の中で働く希望と将来の社会的な自立を目指し、もって個人の尊厳を確保する」ために社会福祉法人横浜愛育会を設立し、現在JR大口駅付近に五つもの事業所を構えます。各事業所では利用者の皆さんが、一生懸命にお仕事をされています。

おすすめは「ふれあいTOMO」。喫茶室にもなっており、ボリューム満点のランチやおいしいコーヒー、更にはお手製のスコーンなどもいただけます。ここはただ単にお茶をするだけではない、とても意味のある出会いの場所です。大口の笑顔の源に会えた気がしました。

社会福祉法人横浜愛育会
横浜市神奈川区大口通一三八―一二
電話：045（433）1134
http://横浜愛育会.com

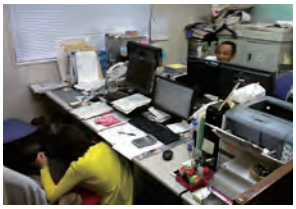
Cool Yokohama Project

産学連携で県主催の「新しい公共フォーラム」に協力

スタートから一年半以上経過してすっかり定着してきた感のあるCYPですが、最近は単発でのインターン受け入れよりも、複数の学生とプロジェクトを組んで課題解決にあたる「産学連携」のパターンが多くなってきました。今回は横浜デザイン学院さんと連携し、神奈川県の「新しい公共フォーラム」に参加したNPO十二団体のPRポスターをデザインしました。NPOへの取材からポスターデザイン、そして展示まで一貫した制作の流れを体験できたことは、学生さんたちにも良い経験になったのではないかと思います。（裏面に作品を掲載しました）

「かながわシェイクアウト」に参加　訓練を実施

九月五日午前十一時。県域一斉のシェイクアウト防災訓練に参加しました。シェイクアウトとは、大地震に襲われたことを想定し、多数の人が一斉にそれぞれの場所で「①DROP（低く）、②COVER（頭を守り）、③HOLD ON（動かない）」の安全確保行動をとる防災訓練で、神奈川県の呼びかけにより六十三万人が参加しました。机の下に散らかっていてもぐれない！、地震だからといって自動車を路肩に止めるのは勇気がいる！など、たくさんの気づきがありました。



「JO」タイトルの由来

「ジェイ・オー」と読みますが、由来は漢字の「恕（じょ）」。論語の衛霊公第十五にこのような話があります。孔子の弟子である子貢が「一言で終身努めるに値する言葉はないでしょうか。」と尋ねたところ、孔子は「それは『恕』だね。自分の望まぬことは他人にしないことだ。」と答えたというものです。

現代では恕は「思いやり」と解釈されることが多く、もちろんそれでも間違いではないのですが、孔子の時代の価値観を考慮すると「我」を離れて天に従うこと、つまり「お天道様に恥ずかしくない」振る舞いをしていれば、自ずと相手を「思いやる」行動になるというのが本来の意味のようです。自らへの戒めとして「JO」をタイトルとしています。

GREEN PRINTING JFPI F-B10042 本工場は、環境に配慮したGP認定工場です。
GOLD+ 環境保護印刷
協進印刷はクリエイターを応援しています！裏面のギャラリーで毎号作品を紹介。　今回は…横浜デザイン学院の生徒さんです。